

# 行政視察報告

日本共産党市議団長

近藤栄次郎様  
檜垣徳雄様

下関市議会議員 江原満寿男

島根県

1. 視察先 隠岐郡海士町
2. 視察年月日 平成30年8月5～7日

視察目的

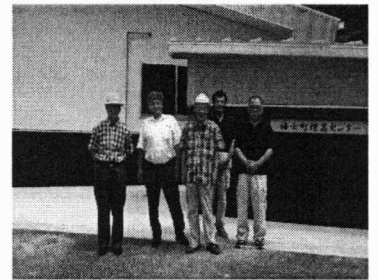
- ①島留学の取り組み
- ②地域との連携
- ③農林漁業振興対策～地域特性生かした町づくり

### 3. 視察参加者

氏名(視察時年齢) 住みよい豊北を守る会の役職～職業など  
重中十士明(87) 会長～豊北まちづくり協議会部長  
市村康男(71) 会員～漁業  
小山勉(79) ～漁業  
古田雅士(69) 役員～有機農業生産法人に勤務  
江原和也(31) ～農業  
江原満寿男(68) 事務局～農業、下関市議会議員



境港よりフェリーで海士町へ向かう



視察参加者(うち1名が撮影)

**1日目** ～豊北総合支所 6時30分発(国道191経由)松江市境港港 14時着  
フェリー「しらしま」境港港 14時25分発～海士町別・別府港 17時15分着  
さらに島内航路 15分で菱浦港へ移動、18時前にホテルにチェックイン

**2日目** 9:00～11:00 漁業振興対策ヒアリング  
(海士町役場で豊守会単独;資料・受入費一人3000円)

海士町漁業の特色

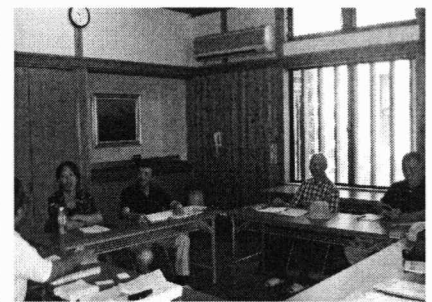
- ①主な漁法、魚種の漁獲量・額の推移
- ②漁業所得階層別現業者数の推移
- ③販路の現状と加工・販売対策
- ④後継者対策及び漁業振興対策上の今後の重点課題への対応

13:20 菱浦港観光協会に集合(以下は、各地からの視察団と合流)

13:25 海士町の紹介(担当課ヒアリング;隠岐乃國学習センター/資料・受入費一人3000円)

15:10 町内案内(海士交通が対応し、交通費一人3000円)～17:10

上「住みよい豊北を守る会」単独で海士町の漁業振興対策枝を聞く



下隠岐乃國学習センターで海士町の照会(当日視察者合同説明会)



### 3日目 高校魅力化事業の取り組み視察

(資料・受入費一人 3000 円)

9:50 隠岐乃國学習センター集合

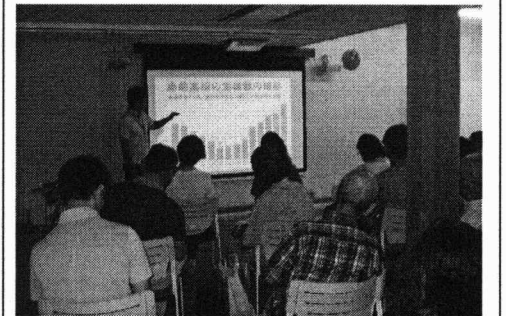
10:00 同所にて高校魅力化プロジェクト紹介

12:00 解散～昼食(海士町にて)

15:15 海士町菱浦港発(フェリーおき)

17:55 七類港着 ※路線バスで境港に移動

豊北町への帰宅は真夜中となりました



高校魅力化事業の説明会

(当日視察者合同説明会)

#### 以下、特記事項＝下関周辺地域の町おこしの教訓になる

▼「ないものはない～離島からの挑戦」最後尾から最先端へ町政の経営方針「自立・挑戦・交流」人と自然が輝き続ける島へ  
＜自立への覚悟の選択＞と＜生きのこりを懸かけた守りの戦略・・・短期決戦＞高校卒業後は、殆どが島外流出(現在高齢化率 40.3%・・・豊北町は同時点で 50%を超えている)。高校自体が、定員を大きく割り込み存続が危ぶまれた。



島の高校存亡の危機をむかえピンチをチャンスに切り替える決意を示すローガン掲げ、起業と島留学を同時に進めた。



いわがきの養殖

「職員が地域を変え

る」として、大合併の嵐の中で覚悟の単独町政を決断。島の生き残りを掛けた「海士町自立促進プランを策定(H16.3)。そこで、徹底した行財政改革で「守り」を固めるとともに、「攻め」の方策として新たな産業創出を強力に推進する両面戦略を打ち立て、人件費カット分(H17 年度削減効果 2 億円)で、「健やか子育て支援条例」を制定し年々拡充しながら、あとは産業振興に充てているという。

＜生き残るために攻めの戦略・・・中長期決戦＞地域資源を活かし、第 1 次産業の再生で、島に産業を創り、島に人を増やし、外貨を獲得して、島を活性化することと、島の成長を外に求めた。

その第 1 弾＝「島じゃ常識！さざえカレー」H29 年度売り上げ 3000 万円。

第 2 弾＝「隠岐海士のいわがき・春香」現在 50 万個を養殖。県のブランド 5 品目に認定。「海士いわがき生産(株)」が立ち上がり、H29 生産目標 1.3 億円。現在 15 名の漁業者が取り組み、100 万個の出荷体制を見込んでいるという。

さらに、産業振興の命運をかけ、商品開発から販売までを担い、先導する第 3 セクター「(株)ふるさと海士」を立ち上げた。資本金 2.55 億円の内、町が 2.4 億円を出資した。以来、様々な法人経営が芽吹き(14 法人と 6 団体が起業)、「海士ファンド・バンク」まで設置されて畜産業 2 人と漁業 3 人が活用している。「海士乃塩」「隠岐牛」「干ナマコ」等の商品開発から、地域通貨などへと展開した。

モノづくりをベースとした産業振興で U ターン者 204 人(H25.3)。I ターン 384 世帯 566 人が海士町に定住した。



宿から見える海士町の夕暮れと朝

### ▼起業と定住が、高校存亡の危機を救う

こうした島ブランド化の取り組みが、「小さな島での日本一の教育＝大連携教育につながる」

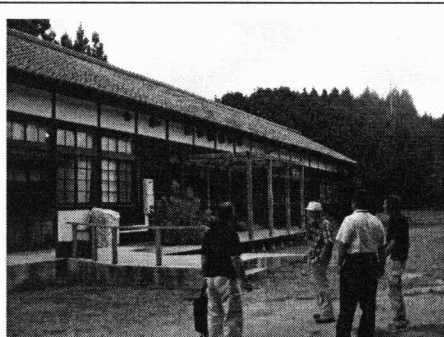
→保・小・中・高の連携教育 →中学校のエコ回収と環境教育 →島まるごと図書館構想 →食育→地域教育 →お山の教室事業 →島留学の展開につながる(国際交流も)

### 島前高校魅力化プロジェクト

～全国からも生徒が集まる地域×学校づくり～

入学者数が、77人(H9)から10年間で、28人(H20)激減。全学年1クラスになり

り、統廃合の危機が迫る。高校の存続は島の存続に直結する。「ピンチは、変革と飛躍へのチャンス」という信念で島前3町村と県立高校が連携して改革構想を作成(H20)し、全国からも生徒が集まる魅力的な高校づくりを推進中。H24年度から志願者が倍増59名2学級となり、島外からの入学も23人となった。



廃校を「地域活動に開放」

### ▼町費で最新冷凍設備 CAS 導入には、感心しました。

魚の販路拡大と漁価維持に貢献 ～年間予算50億の海士町が5億支出して導入

H31年度一般会計予算1145億1千万円(海士町の20倍以上)の下関市のやる気が問われます。

**CAS (Cells Alive System)** とは磁場エネルギーで細胞を振動させることで、細胞組織を壊すことなく凍結させることが出来る画期的なシステム。解凍しても通常の急速冷凍物のようなドロップなどは一切起こさず、長期間にわたって鮮度を保持できる。つまり、とれたての味をそのまま封じ込め、解凍後もとれたての味をそのまま食することが可能になる。

このCASを導入することにより、海士の漁師の食卓が直接都市の消費者にも届けられる環境が整った。CASを離島の流通のハンディを克服する最大のツールとして、島から高付加価値商品を生み出し、第1次産業の復活と後継者育成につなげるために、全国自治体の中で、いち早く導入した。

CAS商品 H28年度売り上げ実績⇒2億905万4千円, H29年度売り上げ目標⇒2億2000万円

(以上)